



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	英語ライティングにおけるチャットを活用したプレライティング・ディスカッションの考察 : 「深い学び」と「協同学習」に焦点を当てて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	青木, 千加子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	乙第7222号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95265
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	AOKI_Chikako_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：青木 千加子

学位論文題名

英語ライティングにおけるチャットを活用した
プレライティング・ディスカッションの考察：
「深い学び」と「協同学習」に焦点を当てて

本研究は、日本人英語学習者を対象に、ライティング学習においてチャットをプランニングとして活用し、プレライティング(W1)からポストライティング(W2)に至る過程での学習者の意識の変化および知識構築のプロセスを、「深い学び」と「協同学習への指向性」に焦点を当てて検討した応用言語学研究である。2012年の中央教育審議会答申を受けて、「アクティブ・ラーニング」が文部科学省の施策用語となったが、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークなど協同学習的な外見に注意が注がれ、そこで起こる学習者の思考や内省など内的プロセスを軽視しているという批判を招いた。これを受けて、2018年に発表された高等学校学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」という用語が登場し、学習事項の断片的な理解や記憶に留まらず、既有知識や先行経験と結びつけながら内省したり、別の文脈の問題に学習した知識を転移して適用したりする深い学習を、社会の縮図としての教室内学習で他者と学習を共有しながら行う重要性が強調された。本研究は、英語ライティング学習において、Engeströmの学習サイクルに基づき、知識の取得（内化）と問題解決へのその知識の適用（外化）の往復を繰り返すように意図された、チャットを利用したコンピュータ支援型協同学習システムで、学習がどのように進むかを検討している。

「深い学び」と「協同学習」に関する先行研究では、外化が理解の深まりや気づきにどのように貢献し、それが「深い学び」へとどうつながるか明らかにされてきているが、「深い学び」と「協同学習」を統合的に扱った研究は少ないと筆者は指摘している。そこで、自動ペアリングや教員の授業内での介入、ログのダウンロードなどの機能を追加したチャットシステムを使用してライティング授業を実施し、データの収集と分析を行う、以下の3つの研究を実施した。

まず、研究1として対面コミュニケーションとは異なるチャットの特徴を捉え、学習者がチャットを活用する際の知覚と実際のストラテジーの関連を明らかにした。研究課題1では、学習者がチャット中に行う修正に注目し、パソコンの画面の録画データとインタビューを用いて分析を行った。その結果、学習者は誤りの修正だけでなく、バックスペースや語彙の挿入を繰り返し、知っている表現を使う補償ストラテジーや想起ストラテジーを活用していることが確認された。研究課題2では、アンケートで抽出された補償と想起の2つのストラテジーについて、知覚と実際の行動との関連を相関分析した。その結果、特に英語レベルの低い学習者は補償ストラテジーが必要だと感じていても、実際には効果的に使用できていない可能性が示された。一方、想起ストラテジーは英語レベルの高い学習者が効果的に活用していることが確

認された。これらの結果から、チャットでは学習者が自分の考えを整理しつつ発言を構築しており、対話形式でありながら熟考された発話が行われているので、ライティング活動としてチャットを十分に活用できる可能性が示唆された。

次に、研究2としてW1からW2への得点の変化が、英語力、チャットの「対話の質」、「協同学習への指向性」の高さ、および学習者の「学びの深さ」と、どのように関わっているかを量的に検証した。研究課題1では、プランニングとして行うチャットでのディスカッションが、W1からW2にどのような内容的変化をもたらすのかを検証した。学習者は、W1を基に、チャットの内容をコピーしたり、自分の言葉で再構築したり、新たなアイデアを取り入れるなどしてW2を書き上げており、これがW1からW2への得点向上に繋がった。研究課題2では、W1からW2への変化が、学習者の英語力、チャットの「対話の質」、「協同学習への指向性」、そして「学びの深さ」とどのように関連しているかを検討した。その結果、スコアの向上に英語力は影響しておらず、また、「対話の質」とライティングスコアの間には直接的な関連が見られなかった。一方、「協同学習への指向性」が高い学習者は他者のリソースを効果的に活用しており、これがスコアの向上に寄与していた。さらに、学びの深い学習者は、他者の意見を参考にしながら、自分自身の発想を生み出す傾向が強いことがわかった。研究課題3では、学習者の英語力、「協同学習への指向性」、「対話の質」、「学びの深さ」の要因間の相関を分析した。「対話の質」と「学びの深さ」の間に中程度の相関が見られた。一方、「対話の質」とライティングスコアの推移に直接の関連がないことが確認された。ただし、「学びの深さ」とライティングスコアの間には有意ではないものの、傾向としての関連があることが見られたことから、質の高い対話で学びが深まり、それがライティングスコアの向上に影響を与えた可能性がある。

最後に、研究3としてW1からチャットのディスカッションを経てW2に至るまでの学習者の「学びの深さ」が、活動段階ごとにどう変化するかを量的に検証した。また、その変化が英語力、「協同学習への指向性」の高さと、どのように関係があるかを活動ごとに分析した。さらに、W1からチャットのディスカッションを経てW2のプロダクトで、知識がどのように共有され再構築されているかを質的に検証した。研究課題1では、学習者の学びに対する意識（納得度、言語への気づき、知識の想起、知識の構築）について、W1、チャット活動、W2のどの段階で学びの意識が高まったか検証した。「言語への気づき」および「知識の想起」は、W1からチャット活動そしてW2にかけて増加が見られたが、チャット活動からW2への上昇率は他の項目に比べると穏やかであった。「納得度」と「知識の構築」においては、W1からチャット活動、W2まで一貫した増加が確認された。研究課題2では、研究課題1で確認された深い学びの変化と、学習者の「協同学習への指向性」や英語レベルとの関連を検証した。その結果、協同学習への指向性が高い学習者は、特に「納得度」と「知識の構築」において有意な向上を示し、それはW1からチャット活動にかけてとくに顕著であった。これにより、「協同学習への指向性」が高い学習者は、チャット活動により他者との対話や自身の思考を通して知識を構築し、W2でも納得のいく形でライティングを行っていた可能性がある。研究課題3では、学びが深い2名と浅い2名の学習者を比較した。学びの深い学習者は、チャット活動を通じて得た知識を効果的に再構築し、W2でのライティングに活用していた。一方、学びの浅い学習者は、既存の表現や他者の意見を模倣する傾向が見られたが、チャットの対話相手からの支援を受けることで、一定の学習効果が見られた。

以上3つの研究の結果を踏まえ、課題と教育的意義について筆者は次のように述べている。まず、従来は個別に研究が進められてきた「深い学び」と「協同学習」を統合的に考察し、活動ごとに学習者の「深い学び」を可視化する新しい研究方法を提供することができたと主張する。また、これまで無意識に行われていた協同学習が、学習者の「深い学び」に対する意識にどのような変化をもたらすかについても知見が得られたとしている。